

J.D. サリンジャー “The Catcher in the Rye” ロシア語訳における you の処理

—二種類の日本語訳との対比において—

梅 村 博 昭*

(平成 19 年 8 月 23 日受付/平成 19 年 12 月 14 日受理)

要約: サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(『ライ麦畑でつかまえて』)の語り手ホールデンの語りにおいては人称代名詞 you が多用されている。この you は特定の「君」への呼びかけには収まりきらない意味の広がりを持ち、特に翻訳においてこれをどう処理するかは大きな問題といえる。本論においてはライト＝コヴァリョーヴァによるロシア語訳においてこの you がどのように翻訳されているかを分析する。英語における you が一般化された「ひと」を指すことがあるのと同様に、ロシア語においては、主語を省略し、主に二人称単数の動詞を用いて一般的な事柄をのべる普遍人称文がある。ロシア語訳では、ホールデンの多用する you が多様に訳し分けられているが、ホールデンが純粋に個人的な体験を一般化し読者と共有しようとするまさにその局面で普遍人称文があらわれることがわかる。日本においては、野崎孝の訳がこの you を普遍的な「人」を表すものとする立場をとり、極力訳さない自然な訳となっているのに対し、村上春樹訳はこの you を特定の聞き手と解釈して「君」と訳す。この意図の当否の判断は難しいものの、日本語においても告白体文学で前提とされている潜在的な二人称の受け手を明示的に浮かび上がらせることとなった。

キーワード: サリンジャー, 翻訳, ロシア語, 村上春樹

1. はじめに

本論ではサリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(『ライ麦畑でつかまえて』)のロシア語訳および二種類の邦訳について、原文と対比しつつ考察する。とくに原文における二人称の代名詞‘you’がロシア語訳でどのように処理されているかに分析のテーマを絞り込む。カギとなるのはロシア語訳における普遍人称文である。そしてこのロシア語訳の分析から、‘you’とはいったい誰なのか、なぜ我々日本の読者がこの作品の二種類の邦訳を持つに至ったかが一定程度明らかになるはずだ¹⁾。

2. You と普遍人称文

以下の一節はあるロシア小説からのものだが、典型的な普遍人称文を含んでいる。

Давно уже отмечено умными людьми, что счастье — как здоровье : когда оно налицо, его не замечаешь. Но когда пройдут годы, — как вспоминаешь о счастье, о, как вспоминаешь!²⁾

拙訳で示せば「賢い人々によって古くから言われてきたことだが、幸福とは健康のようなもの。手許にあるときには気づかないものなのだ。しかしやがて年月が経つと——

いかに幸福について思い出すことか！いかに思い出すことか！」「気づかないものなのだ」「思い出すことか」と訳した部分は原文では主語がなく、動詞が二人称単数形である。しかしこれらの文は特定の「君」「あなた」について何かを述べているのではなく、このようなことは誰にでも起こりうることだ、ということの意味している。

ロシア語を解さない人でも、英語の‘you’に同様の働きがあることは知っていよう。ロビン・ギル『英語はこんなにニッポン語——言葉くらべと日本人論』のなかに「you は化学」という章がある。ある日本人翻訳家が日本語から英語に翻訳をした。元の日本語は日本語らしい日本語で、主語がない。それを‘I’を主語に立てて訳してあるだが、手直しを頼まれたギルは、それがなんとなくネイティブ・スピーカーの勘にそぐわないので「you 調」でリライトしたというのである。

「もちろん、これはネイティブ・スピーカーの勘がそうさせたのであって、論理とか合理性とは関係ないが、あえて外国人(読者のこと)のために理由をつけようとするれば you は筆者との一体感といい、他人の身になって感じるということといい、感情移入といい、要するに親密感がある。逆にいえば、私のリライトを再び日本語に直したら、[中略]その二人称を完全に省かずにいられない」「これは、英語のク

* 東京農業大学生物産業学部教養分野

ラスの中で教えられた (?) you 調ことわざ—You may lead a horse to water but you can't make him drink. (馬を水場につれて行くことが出来ても、飲ませることは出来ない) 等々——という教順文 (?) の you より、日本語の二人称からいっそう遠い存在で、英語がかなり上手な日本人でさえなかなか使いこなせない文法です。現に、自分向きでも他人向きでもない、もっと純の文体である日記の中でさえ見られる。[中略] この you の中には「わたし」も「あなた」も「人」も、「皆」も含まれている点、日本語の主格無しのと、意外に似ているではありませんか³⁾

あるいは渡部昇一氏の次のような指摘も、普遍的な人称としての 'you' に関連するものだ。シェークスピア『ハムレット』のなかの一節 “There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy.” の 'your' は「君の」ではない、というのである。

「この場合の二人称の your は、話者と聞き手の間に信頼のこもった親近感を作り出し、ごく個人的な肯定的判断や否定的判断を示す働きをしているので『君の』という意味ではない。特に聞き手の人は評価していることかも知れないが、発言者自身は承認しない、嫌悪している、あるいは軽蔑しているのだ、ということを示す「口調」を 'your' で示しているだけなのである。だから右に引用したところを訳せば、

『ホレイショ君よ、天地の間には、哲学なんちゅうものでは夢想もできないことがあるんだぜ』

という風になるであろう。坪内逍遙は、

「この天地の間にはな、所謂哲学いわゆるの思おもい及ばぬ大事があるわい」と訳しているが、これは当時としては驚くべき正確な訳と言うべきである。」⁴⁾

こういう知識の下地があるとロシア語の普遍人称文についても理解が容易である。ただし普遍人称文をめぐるのはロシア語学の専門家のあいだでも定義にばらつきがあり、本論の枠内でそれを詳細に跡付けすることは困難である。本論では中級の文法書に見られる定義をひとまず見て、関係のある範囲でより高度な議論にふれたい。

1997 年に出た『ロシア語百科 [第 2 版]』の「普遍人称文」の項には次のような記述がある。

「普遍人称文 обобщенно-личное предложение 動詞述語をもつ主語のない一文。広い、一般的に呈示された人の集団に属する活動を伝える。На войне встречаешь разных людей. 戦場ではいろんな人に会うものだ——あらゆる者が (あるいは非常に多くの人が) 戦場ではいろんな人に出会う。

普遍人称文の構造は、普遍的な人称が特別の言葉で表し得ないというものである。そのような人称はロシア語の人称代名詞の体系にはない。普遍性を伝えるのは一定の動詞の形である。それらの形は主語を欠いているときのみ普遍

性を表す。従って主語がないことが重要である。普遍人称文の動詞の持つ形は二人称単数形、あるいははるかにまれに三人称複数の現在形・未来形に一致する。」⁵⁾

ここで問題になるのは動詞が二人称単数以外のものをどう考えるかという点であるが、本論ではこの問題は考慮しない。中澤英彦氏はヤコブソンの欠性二項対立を援用した叙想性、時制、人称、数の模式のなかで、直説法、非過去時制、二人称、単数が「最も弱い無標項」であることから普遍人称文には二人称単数が多いのだとしている⁶⁾。この当否を判断する能力は筆者にはないが、ここでは普遍人称文は主に二人称単数であるというのはよく知られた事実であるという前提に立って論を進めたい。ちなみに中沢氏はヴィノグラードフによる次の一節を引いている。

「一人称単数、複数形と異なり (その場合は転義的な使用においてさえ具体的な発話の主体への関係が明確に保たれる)、二人称形ははるかに不確定でさまざまな解釈を許す。二人称形は一人称形より抽象的である。所与の具体的な話し相手への直接の関係を失うことで、それは普遍的な意味を獲得する」⁷⁾

もう一つは主語の欠如が本質的な問題かどうかである。この問題についてはのちに具体例を見ながら中澤氏の論文に立ち返る。

3. ロシア語訳『ライ麦畑』

2002 年 11 月 26 日の朝日新聞は、明くる年、村上春樹が J.D. サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』の新訳を発表すると報道した。筆者は、この作品にはロシア語訳もあることに思い至り、好奇心からサリンジャーの原文とロシア語訳を比べてみた。この作品がソ連でもベストセラーであること、翻訳を手がけたライト＝コヴァリョーヴァ (1898～1988) がソ連翻訳界の大家であることは以前より日本でも紹介されていた⁸⁾。

英語の原文とロシア語訳をならべて読んでみて、すぐにあることに気づいた。この作品は主人公ホールデン・コールフィールドによる一人称の語りなのだが、'you' が異常なまでに多用されている。これは原作を読んだ者は誰も気づくことで、村上春樹訳の出版を記念して雑誌『文学界』2003 年 6 月号が企画した文学者の鼎談でもまずこの 'you' がどのように処理されているかが話題になっている。沼野充義氏はこう発言している。

「冒頭から、もし君が俺の話を聞きたければな、と始まるわけですが、この『you』はいったいどういう設定なのか。

これは以前から思っていたことですが、村上さんは人称代名詞をかなり意図的に訳出することが多いんですね。この冒頭は、特定の聞き手を想定しているような感じも受けるのですが、英語の『you』には、一般的な人を指す使い方があって、それは大体において日本語に訳さない方が自然なんです。『翻訳の世界』的な、こうやるとうまく訳せます

よというレベルの技術論だと、訳してはいけない、といわれる」⁹⁾

そこを村上訳はあえて「君」と訳出し、その点が ‘you’ を可能な限り訳さなかった野崎孝氏の訳との最大の違いになっている。

ではロシア語訳ではこの ‘you’ はどうなっているのだろうか。筆者がまず思ったことは、ほぼ自動的に普遍人称文に置き換わるのではないか、ということであった。しかし作品の最初を見ればすぐ分かるとおり、事情はそれほど簡単ではない。原文、野崎訳、ロシア語訳の順で例を挙げる（下線はすべて梅村によるもの）。

If you really want to hear about it, the first thing you’ll probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like, and how my parents were occupied and all before they had me, and all that David Copperfield kind of crap, ... (p. 1)¹⁰⁾

「もしも君が、ほんとにこの話を聞きたいんならだな、まず、僕がどこで生まれたかとか、チャチな幼年時代はどんなだったのかとか、僕が生まれる前に両親はなにをやってたかとか、そういった《デヴィッド・カパーフィールド》式のくだらないことを聞きたがるかもしれないけどさ、.....」(5 頁)¹¹⁾

Если вам на самом деле захочется услышать эту историю, вы, наверно, прежде всего захотите узнать, где я родился, как провел свое дурацкое детство, что делали мои родители до моего рождения—словом, всю эту давидкопперфилдовскую муть. (C. 5)¹²⁾

ロシア語訳のホールデンは вы で語りかけている。英語の ‘you’ と同様、語りかけられる相手が単数複数どちらなのか分からない。読者一般への語りかけのようでもあるし、ты 呼ばわりできない特定の誰かへの語りかけのようでもある¹³⁾。

Like as if all you ever did at Pencey was play polo all the time. (p. 2)

「まるで、ペンシーじゃ、しょっちゅうポロかなんかやってみみたいな感じなんだな」(6 頁)

Как будто в Пэнси только и делают, что играют поло. (C. 6)

原文の ‘you’ は決して「君がペンシー校に在学していたこと」を含意するわけではない。野崎訳も、主格を省いた「いい日本語」¹⁴⁾ になっている。そしてロシア語訳では、不定人称文が用いられており、行為の主体はぼかされている。

次の例では文意を明確にするために、‘you’ はロシア語訳では「我々」に置き換えられている。

It was the last game of the year, and you were supposed

to commit suicide or something if old Pencey didn’t win. (p. 2)

「そいつは一年の中の最後の試合で、もしもペンシーが負けたら、首でもくくらなきゃなんないみたいなんだ」(7 頁)

Матч был финальный, и, если бы наша школа проиграла, нам всем полагалось чуть ли не перевешаться с горя. (C. 6)

次の例でも普遍人称文は出てこない。

You could see the whole field from there, and you could see the two teams bashing each other all over the place. You couldn’t see the grandstand too hot, but you could hear them all yelling, ... (p. 2)

「そっからは、競技場の全体が見えたし、両方のチームが猛烈にぶつかり合っているのがよく見えた。観覧席はあんまりよく見えなかったけど、叫んでる声は聞こえたな」(7 頁)

Оттуда видно было все поле и как обе команды гоняют друг дружку из конца в конец. Трибун я как следует разглядеть не мог, только слышал, как там орут. (C. 6)

ロシア語訳では「そこからはフィールド全体が、そして両チームが端から端まで互いを追い立てている様が見えた」の部分は видно という無人称述語を用いた無人称文である。「観客席は十分には見えず、そこで皆がわめき声をあげているのが聞こえた」の部分は я が主語になっている。

このように、作品の冒頭を見ただけでもサリンジャーの ‘you’ の使用はあまりに過剰で、普遍人称文に自動的に置き換わる、とか、вы のみで押し通せる、といったものではないことがわかる。

4. ロシア語訳における普遍人称文

では普遍人称文に置き換わっているのはどんな箇所であろうか。どんな箇所でも ‘you’ は普遍人称文と重なり合うのであろうか。

It was a terrible school, no matter how you looked at it. (p. 3)

「すげえ学校さ、どう考えたって」(7 頁)

Гнусная школа, ничего не скажешь. (C. 6)

ロシア語訳は「ひどい学校で、(君は=人は)何も言うことはできない」となっていて、原文の “no matter how you looked at it” とは少し距離があるが、一般的な判断を述べている文がこのように普遍人称文に置き換わっている例が全編を通して見られる。

さらに次の例では ты の与格 тебе が出てくる。

What I liked about her, she didn’t give you a lot of horse manure about what a great guy her father was. (p. 3)

「僕が彼女のどこが気に入ったかというとな、彼女、おやじがどんなにすごい有力者かってことを、テンから意識してないんだな」(8頁)

Понравилось мне то, что она тебе не вкручивала, какой у нее замечательный папаша. (C. 6)

このような ты は辞書では「人間一般、何らかの不定の人称の集団を表すのに用いられる」¹⁵⁾とされるもので、決して語り手は вы で呼びかけるべき相手を「お前、君」呼ばわり(тыкать)しているわけではない。文自体は она を主語とするのもで先ほどの普遍人称文の定義にはあてはまらないが、この ты およびその斜格は普遍人称の ты としか呼びようがない。‘you’ がどのように訳されているかを見ていく際には、このように斜格であらわれているもの、すなわち「主語が省かれ二人称単数の動詞を用いる一肢文」に置き換えできないものも無視できない。そこで以下では、「普遍人称文」および「普遍人称の ты とその変化形を含む文」を等しく原文の ‘you’ を反映したものとして拾い上げていきたい。

ホールデンの語りかける ‘you’ は、先の沼野氏が「特定の聞き手を想定しているような感じも受ける」と指摘するのとおり、文学的に高度に仮構された聞き手という一面を持っていて、決して英語における ‘you’ の「普遍人称」的な、あるいは「無人称」的な用法にとどまるものではない。しかしそれがそれがギルのいうような ‘you’ の働き、『わたし』『あなた』『人』『皆』もふくむ ‘you’ の性質に大きく依拠することではじめて可能になっていることもまた否定できない。文学的に仮構された ‘you’ と、特定の誰かを指さない ‘you’ と、この両者はどこかで明確に線引き出来るものではなく、そのような区別は、英語でこの作品に接する英語圏の読者にとってはおよそ無意味なことであろう。どの部分の ‘you’ をとって、そのふたつの側面が重ね合わさっていて、これは普遍人称の ‘you’、これは作者が造形した特定の聞き手としての ‘you’ というふうに区分けすることはできないのだ。しかしいったん翻訳というフィルターを通すと、この点が俄然問題になる。日本語に翻訳する場合には、一方の側面を強調するともう一方が引っ込むという関係にあるように思われる。その点で ‘you’ を極力訳さない野崎訳と「君」という訳語を積極的に使う村上訳は著しい対象をなす。

一方ロシア語訳は、語り手は読者に вы で語りかけながら、自分の経験を一般化しようとしているような部分は相当程度「普遍人称文および普遍人称の ты を含む文」に訳されている。そこでは ‘you’ のもつふたつの側面はどのように現れているであろうか。

以下、普遍人称文に置き換わっている例、普遍人称 ты を含む文を挙げる(原文、野崎訳、ロシア語訳の順)。

You couldn't rile him too easily. (p. 34)

「こいつに皮肉をわからせるのは容易じゃないんだな」(56頁)

Его ничем не подденешь. (C. 33)

「(君は=人は) どうやっても彼を怒らせることはできな

い」

You'd think he was doing you a big favor. (p. 36)

「まるでこっちが恩恵を施されてるみたいなんだ」(59頁)

Можно было подумать, что он тебе делает величайшее одолжение. (C. 35)

「彼が(君に=人に)大きな恩恵を施しているように思えた」

People never believe you. (p. 37)

「大人ってのは絶対ひとを信用しないものなんだ」(60頁)

Никогда тебе люди не верят. (C. 35)

「人々は君を(=人を)決して信用しない」

You were always watching somebody cut their damn toenails or squeeze their pimples or something. (p. 42)

「誰かが足の爪を切ったり、ニキビをいびったり、いつも、そんなのばっかし見せられるんだからな」(68頁)

Вечно при тебе то прыщи давят, то ногти на ногах стригут. (C. 40)

「永久に君の(=人の)いるところでニキビをつぶしたり、足の爪を切ったりする。

Everything you said made him sore. (p. 83)

「こっちで言うことにいちいち腹を立てるんだから」(131頁)

Что ему ни скажешь, на все обижается. (C. 77)

「(君が=人が)彼に何を言っても、全てに腹を立てるのだ」

If you want to stay alive, you have to say that stuff, though. (87)

「でも、生きていたいと思えば、こういうことを言わなきゃならないものなんだ」(137頁)

Но если хочешь жить с людьми, приходится говорить всякое. (C. 80)

「(君が=人が)人々とともに生きたければ、あらゆることを言わなければならない」

If somebody knows quite a lot about these things, it takes you quite a while to find out whether they're really stupid or not. (p. 105)

「そういうことをいっぱい知っている相手だと、さてこれが本当は馬鹿なのかどうか、短い間にはわかるもんじゃないぜ」(165頁)

Когда человек начинен такини знаниями, так не скоро сообразишь, глуп он или нет. (C. 96)

「人がそういう知識を頭にいっぱい詰め込んでいると、(君は=人は)その人が馬鹿なのかどうかすぐには分からない」

ホールデンは、自分のごく個人的で断片的な経験から生まれた判断を一般化して言うときに ‘you’ を立てる傾向

が著しく、そういう文は普遍人称文、または普遍人称の ты を含む文になりやすいという印象を受ける。スコブリコヴァは、普遍人称文のなかでは「話者の生活上の経験、あるいは彼が獲得した集団的経験が一般化される」¹⁶⁾と述べている。これは普遍人称文の意味がギルの指摘する ‘you’ の働きと重なる部分である。

次の引用はホールデンが女の子とデートをしてもどうしても最後の一線を越えられない理由について述べている場面だが、ロシア語訳では вы へ語りかけていながら普遍人称文を多用し、you が主語ではないところまで普遍人称文に訳されている

The thing is, most of the time when you’re coming pretty close to doing it with a girl—a girl that isn’t a prostitute or anything, I mean, she keeps telling you to stop. The trouble with me is, I stop. Most guys don’t. I can’t help it. You never know whether they really want you to stop, or they’re just scared as hell, or whether they’re just telling you to stop so that if you do go through with it, the blame’ll be on you, not them. Anyway I keep stopping. The trouble is, I get to feeling sorry for them. I mean most girls are so dumb and all. After you neck them for a while, you can really watch them losing their brains. I don’t know. They tell me to stop, so I stop. I always wish I hadn’t, after I take them home, but I keep doing it anyway. (p. 92)

「実をいうと、女の子と——といっても淫売やなんかじゃない女の子だぜ——もう少しでそうなりそうなところまで行くと、たいていの場合、女の子のほうで、やめてくれって言いづけるんだな。僕の困ったところは、そこでやめちゃうんだよ。たいていの奴はやめないけど、僕はやめないではいられないんだ。果たして女の子が、本当にやめてもらいたいのか、ただ、ひどくおびえているだけなのか、それとも、そう言っておけば、こっちが最後までやっちゃったときに、責任をこっちに持ってこれるからというんでやめろと言ってるだけなのか、わかったもんじゃない。けど、とにかく僕は、やめてばかりいるんだよ。相手が気の毒になるんで、困るんだ。つまり、女の子って、たいていは頭が鈍いかなんかするだろう。しばらく抱き合ってるうちに、みても、相手の理性を失っていくのがはっきりわかるんだよ。本当に燃えたときの女の子をみてみたまえ、理性なんかなくしちゃってるから。僕にはわかんないな。相手がやめろと言うから僕はやめるんだ。相手をうちまで送り届けてから、やめなきゃよかったといつも思うんだけど、やっぱり僕はやめてばかりいるんだ」(144-145頁)

Главное, что как только дойдет до этого, так девченка, если она не проститутка или вроде того, обязательно скажет: «Не надо, перестань». И вся беда в том, что я ее слушаюсь. Никогда не знаешь—ей вправду не хочется, или она просто боится, или она нарочно говорит «перестань», чтобы ты был виноват, если что случится, а не она. Словом, я сразу слушаюсь. Главное,

мне их всегда жалко. Понимаете, девченки такие дуры, просто беда. Их как начнешь целовать и все такое, они сразу теряют голову. Вы поглядите на девченку, когда она как следует распалится—дура душой! Я и сам не знаю, они говорят «не надо», а их слушаюсь, Потом жалеешь, когда проводишь ее домой, но все равно я всегда слушаюсь. (С. 84)

あくまでも自分の体験を語りながらそれが一般的な真理でもあるかのように普遍人称文が連なっている。Потом жалеешь, когда проводишь の部分は、原文では主語が I なのに普遍人称文に置き換わっている。ホールデンが ‘you’ の持っている機能を最大限に利用して自分の経験を読者と共有しようとしているさまが、普遍人称文によってうまくロシア語に移し替えられている（なお、四角で囲った部分は、相手に対し вы で語りかけている部分）。スコブリコヴァは「ときには、持続的に繰り返される純粋に個人的な過去の印象（対話の相手の側からの共感と理解をあてにした）が凝固することがある」¹⁷⁾と述べているが、まさにそのような例と言える。普遍人称文の機能が、ホールデンが回想の中で繰り返し ‘you’ を用いていることに呼応しているのだ。同様の例を挙げてみる。

Then, after a while, you could tell he wasn’t kidding any more. The thing is, it’s really hard to be roommates with people if your suitcases are much better than theirs—if yours are really good ones and theirs aren’t. You think if they’re intelligent and all, the other person, and have a good sense of humor, that they don’t give a damn whose suitcases are better, but they do. (p. 109)

「ところが、しばらくたつうちに、それが冗談でなくなってきた。実際、自分のスーツケースよりもはるかに悪いスーツケースを持った奴と同室になってみたまえ、なかなかやりにくいもんだぜ——こっちのが本当に優秀で、相手のがそうでない場合にだよ。もしもそれが頭のいい奴で——それがって、相手がだよ——頭のいい奴だったりなんかしてユーモアのセンスのある奴だったらば、どっちのスーツケースがよかろうと、そんなこと気にするはずはないと思うだろう。ところがそうじゃないんだな」(170頁)

Но потом я видел, что он уже не шутит. Все дело в том, что трудно жить в одной комнате с человеком, если твои чемоданы настолько лучше, чем его, если у тебя по-настоящему отличные чемоданы, а у него нет. Вы наверно, скажете, если человек умен и у него есть чувство юмора, так ему наплевать. (С. 99)

‘you could tell’ の部分は я видел「僕にはわかった」と主語が置き換えられているし、‘You think if they’re intelligent and all’ の部分は вы наверно скажете「あなたはもしかしたらいうだろう」と主語が вы に置き換わっている。しかし твои чемоданы、「君の＝人のスーツケース」если у тебя по-настоящему отличные чемоданы「も

し君に＝人に本当に立派なスーツケースがあったなら」の部分には普遍人称の ты が現れていて、スーツケースをめぐる些細な経験を一般化して述べようとしていることがうかがえる。ふたたびスコブリコヴァの言葉を借りるならば「話者が対話の相手を共同的な観察、共同経験へと招いていることへの暗示」¹⁸⁾ がここにはある。

Catholics are always trying to find out if you're a Catholic. It happens to me a lot, I know, partly because my last name is Irish, and most people of Irish descent are Catholics. As a matter of fact, my father was a Catholic once. He quit, though, when he married my mother. But Catholics are always trying to find out if you're a Catholic even if they don't know your last name. (p. 112)

「カトリック教徒は、いつも、相手がカトリックかどうかを、確かめようとするからさ。僕は、何度もそういう目にあっただけだ、それは、ひとつには、僕の姓がアイルランド系の姓で、アイルランド系の人はいいてカトリックだからなんだ。実をいうと、僕のおやじも、かつては本当にカトリックだったんだ。ただ、おやじの場合は、おふくろと結婚するときに、それをやめちゃったけどさ。でも、カトリック教徒が、たとえ姓を知らない相手だって、カトリックかどうかを必ず確かめようとするのはまちがいないよ」(175 頁)

Католики всегда стараются выяснить, католик ты или нет. Со мной это часто бывает, главным образом потому, что у меня фамилия ирландская, а коренные ирландцы почти все католики. Кстати мой отец раньше был католиком. А потом, когда женился на моей маме, бросил это дело. Но католики вообще всегда стараются выяснить, католик ты или нет, даже если не знают, какая у тебя фамилия. (С. 101)

ここでも、カトリック信者は相手がカトリックかどうか知れたがるものだということはホールデン個人の体験に基づく感想にすぎないが、彼はそれを普遍性のあることのように言おうとしている。こういう箇所もすんなりと普遍人称の ты を含んだ文になる。

ホールデンの、‘you’ を駆使した語りがひとつの頂点に達するのは、ホールデンが小学校時代、課外授業でよく訪れた博物館の思い出話をするくだりである。その内部の様子を詳細に語るホールデンは終始一貫して ‘you’ を用い、小学生だった頃の自分の視線で読者に博物館の内部を体験させている。この部分はロシア語訳ではところどころ ‘you’ が мы「我々」に置き換わっているが、その最後の部分、博物館はいつ行っても何も変わっていない、変わっているのはそれを訪れる人間のほうだ、というくだりは、‘you’ を普遍人称の ты で訳出している。

Nobody'd be different. The only thing that would be different would be you. Not that you'd be so much older

or anything. It wouldn't be that, exactly. You'd just be different, that's all. You'd have an overcoat on this time. Or the kid that was your partner in line the last time had got scarlet fever and you'd have a new partner. Or you'd have a substitute taking the class, instead of Miss Aigletinger. Or you'd heard your mother and father having a terrific fight in the bathroom. Or you'd just passed by one of those puddles in the street with gasoline rainbows in them. I mean you'd be different in some way—I can't explain what I mean. (p. 121–122)

「何一つ変わらないんだ。変わるのはただこっちのほうさ。といっても、こっちが年をとるとかなんとか、そんなことを言ってんじゃない。厳密にいうと、それとはちょっと違うんだ。こっちがいつも同じではないという、それだけのことなんだ。オーバーを着てるときがあったり、あるいはこのまえ組になった子が猩紅熱になって、今度は別な子と組になってたり、あるいはまた、エイグルティンガー先生に故障があって代わりの先生に引率されてたり、両親がバスルームで凄いい夫婦喧嘩をやったのを聞かされた後だったり、道路の水たまりにガソリンの虹が浮かんでるところを通ってきたばかりであったり。要するにどこかが違ってんだ——うまく説明できないけどさ」(188–189 頁)

Ничто не менялось. Менялся только ты сам И не то что ты сразу становится много старше. Дело не в том. Но ты менялся. И все. То на тебе было новое пальто. То ты шел в паре с кем-нибудь другим, потому что прежний твой товарищ был болен скарлатиной. А то другая учительница вместо мисс Элгетингер проводила класс в музей. Или ты утром слышал, как отец с матерью ссорились в ванной. А может быть, ты увидел на улице лужу, и по ней растекались радужные пятна от бензина. Словом, ты уже чем-то стал не т о т—я не умею как следует объяснить, чем именно. (С. 109)

ты の繰り返しがリズムカルで畳みかけるようだ。原文の ‘you’ を「我々」や「僕」に置き換えてしまったとしたら、この感じは出なかつただろう。ロシア語訳のホールデンの語りの中には二人称の受け手がこうして明示的に内包されているのである。

5. ты とは誰か

ところで、主語を省略した二人称単数の動詞からなる一肢文を普遍人称文とすれば、厳密には主語に ты をもつ文は普遍人称文とはいえないことになる。前出の中澤氏はこの点について次のように述べる。

「普遍人称文といえばふつう一肢文と考えられている。しかし、一般的な人称の意味で用いられ、かつ代名詞主語をもつ二肢文も存在する。この種の文は文学的な記述や日常会話に特徴的である。

Ты ждешь час, другой, а его нет.

形態を重視する立場からは、このような文が典型的な普

遍人称文の意味をもとうとも普遍人称文ではなく、ふつうの二肢文の意味的、文体的な変種にすぎないと考えられることもできるだろう。

しかし、文が動詞文でなく名辞文ならば、普遍的な意味を持つが、文の主体の人称は、人称代名詞を用いて統語的に示すしか方法がない。

Когда ты молод, все кажется прекрасным¹⁹⁾

一方でスコブリコヴァは「普遍人称文は必ずしも一肢文ではない。その中では主語 ты がやはり普遍人称的な意味を持って用いられることもあり得る」としている。「二肢文の普遍人称の構文では対話の相手（読者）の共同的な観察への〈招待〉は一肢文に比べてより明瞭である。そしてそれらが、対話の相手（読者）への文字通りの呼びかけを含む定人称文と、いわば境を接していることもまれではない」²⁰⁾

上の博物館のくだりでは ты プラス動詞の過去形というかたちが繰り返し現れていて、主語は通常省かれるという定義からも、動詞は現在形ないし未来形であるという定義からも外れる。動詞が過去形であることから、主語が省かれた場合、ты なしでは人称が推定できないのだ。主語が繰り返し現れているせいで、スコブリコヴァも言うとおり、読者への呼びかけの感覚は主語なしの普遍人称文よりずっとはっきりしている。先程述べた辞書的な説明に従うならば上の例での ты は「博物館を訪れるものなら誰しも」を表すことになるが、読者あるいは「特定の誰か」へ直接語りかけているという感覚も非常に強く感じられる。それは「対話の相手との、信頼関係のある、親密な、しばしば心のこもった叙情的なまじわり」²¹⁾ というべきものだ。

また、このとき ты の文法上の性が男性であることにも注目したい。サリンジャーのこの作品の研究が隆盛を極め、この作品がアメリカ文学の古典の位置にまで押し上げられたのは、白人男性の研究者たちがホールデンと自分をナルシスティックに同一視し、富裕な白人少年にすぎないホールデンを青少年の典型像にまで一般化したからだというシュライバーによる指摘がある²²⁾。この立場から見ると、ここでの ты の文法上の性が男性であることに、‘you’ とは誰なのかという問題についてのひとつの手がかりがあるようにも思われる。

6. 潜在的な二人称—二種類の日本語訳をめぐって

ここで日本語訳の問題に立ち入りたい。

野崎訳は ‘you’ を「こっち」と訳す「いい日本語」になっている。‘you’ の普遍性を別な形に置き換えて伝えようとしていて、何より読んでいて自然である。日本語で ‘you’ の持つ普遍性を訳出しようとすれば野崎訳のように「訳さない」のが一番である、という印象を受ける。しかし、すんなりと読めてしまう分、原文の持つ強い印象は犠牲にされている感がなくもない。

この部分の村上春樹訳はどうなっているだろうか。

「みんなこれっぽっちも違わないんだ。ただひとつ違って

いるのは君だ。いや、君がそのぶん歳をとってしまったとか、そういうことじゃないよ。それとはちょっと違うんだ。ただ君は違っている、それだけのこと。今回君はオーバーコートを着込んでいるかもしれない。あるいはこの前列を組んだときの君のパートナーは、今回は猩紅熱にかかっていて、君には新しいパートナーがいるかもしれない。あるいは君のクラスを今回率いているのはミス・エイグルティンガーじゃなく、代理の先生かもしれない。あるいは君はバスルームで母親と父親が激しい喧嘩をしているのを耳にしたあとかもしれない。あるいは君はさっき通りがかりに、水たまりにガソリンの虹が浮かんでいるのを目にしたかもしれない。つまり僕がいたいのはさ、君はなんらかの意味でこの前の君とは違っているということなんだ。うん、うまく説明できないんだけどさ」²³⁾

村上の訳はきわめてチャレンジングである。なぜなら、日本語の「君」には英語の ‘you’ のような、あるいはロシア語の ты のような、「筆者との一体」「他人の身になって感じる」「感情移入」といった特徴、「人間一般、何らかの不定の人称の集団を表すのに用いられる」という意味の広がりはないと思われるからだ。ふつうの日本語の感覚では「君」には普遍性はないのだ。しかしここにこそ村上の意図がある。

「もう一つ、これは流行とも風俗とも関係ないことなんです。『キャッチャー』の場合、語り手であるホールデンが you に向かって語りかけているという形を取っているわけですね。その you なるもの＝語りかけられる存在をどういうふうに捉えるか、どこまで具体的に訳出していくかということで、文章の感じはけっこう違ってきます。作品のストラクチャーそのものの印象が変わってくるかもしれない」²⁴⁾

この「語りかけられる存在」= ‘you’ とは誰なのか。

それについては、作品中には結局手がかりはない。この ‘you’ を、ホールデンが収容されている病院の精神分析医のたぐいであると解釈しようとしても、最後になって「精神分析の先生」“this one psychoanalyst guy” がくだらないことばかり訊くので困っているというくだりがあり、そうは読めない。明らかなのは、‘you’ への語りかけという手法がホールデンのキャラクター自体と密接に関わっているということだ。ここまでの分析で明らかな通り、ホールデンの饒舌な告白のほとばしりは、受け手としての ‘you’ を仮構することによってはじめて可能となっているのである。むろん冒頭に引いたギルの言うとおりの ‘you’ は「わたし」も「あなた」も「人」も「皆」をも包摂し、とどのつまりは誰でもないのかもしれない。「いい日本語」に訳するときは主語の不在によって指し示されるべきものなのかもしれない。しかしギル自身が言っているとおりの、この ‘you’ が誰に宛てたわけでもない日記の中にさえ見られるとするならば、一人称による告白という形式自体が、その不可欠の支柱として二人称の受け手を要請する、という

ことにならないか。野崎孝の訳ではこの ‘you’ が字面からはほとんど隠れているので、我々はうかつにも長い間そのことに気づかなかった、ということではないのか。告白する自我という、絶え間ないつぶやきに満たされた仄暗いこの広がり、暫定的な宛て先としての ‘you’ を含みこむことによって始めて成立しているのではないか。ひいては一人称という言語上の現象自体が、「第二の人称」へのもたれかかりなくしては自壊するほかないのではないのか。もちろん日本語においてこの告白は「あなた」「君」と具体的に呼びかけることを必ずしも必要としない。たとえば太宰治『人間失格』において、手記の書き手である「自分」が明示的に読者に向かって「あなた」と呼びかける箇所はほぼ皆無である。にもかかわらず奥野健男氏は次のように指摘するのだ。

「太宰治の文学は、どんな小説でも君よ、あなたよ、読者よと直接作者が呼びかけてくる潜在的二人称の文体で書かれている。この文体に接すると読者は、まるで自分ひとりに話しかけられているような心の秘密を打ち明けられているような気持ちになり、太宰に特別な親近感をおぼえる。そして太宰治は自分と同じだ、自分だけが太宰の真の理解者だという同志感を持つ」²⁵⁾

これは果たして太宰についてのみ言いうることであろうか。野崎孝訳『ライ麦畑で捕まえて』に接した日本の若い男性読者の多くはそうに思わなかったであろうか。太宰についてのこの指摘は、前出のシュライバーによる白人男性研究者批判が取り上げているのとはほとんど同じ事態を、まったく別の側面から捉えたものである。なぜ読者は語りかけてくる「僕」や「自分」を自らと自己愛的に同一視するのか。奥野氏は、それは二人称の聞き手への親密な語りかけによって引き起こされている、と言っているのである。

ここまで来れば、絶えず読者に向かって「諸君」と語りかけるドストエフスキー『地下室の手記』の主人公とホールデンを比較するのもあながち突飛なことではない。リリアン・ファーストは両作品を比較してこう述べている。

「両作品において、明らかにこの手法〔読者への呼びかけ〕が、登場人物と読者を話し手と聞き手として直接に結びつけ、読者の突出した関与へと導くのである。直接性と接触のリアルな感覚があり、それは主人公のコミュニケーションしようとする衝動と確実に結びついているに違いない」²⁶⁾

先に述べたとおり、日本語では普遍性を優先すると ‘you’ を省くほうが自然で、このホールデンの衝動が今ひとつ伝わってこない。村上は ‘you’ をあえて「君」と訳出することでこのホールデンのコミュニケーション衝動を伝えるという選択をしていると思われる。ロシア語では、普遍人称の ты を用いているところは、人称の普遍性をあらわしながらも、このホールデンの性急なコミュニケーション衝動をも十分に伝えている。スコブリコヴァも言うとおり、普

遍人称文が、特定の誰かへの呼びかけと境を接するところまで、いわば極限まで酷使されているのだ。

ここで興味深いのは、デヴィッド・ロッジがこの小説のことを「ティーンエイジ・スカース」と定義していることだ。

『スカース』(skaz) はなかなか魅力的なロシア語で、英語風に『スキヤツ』と読めば『ジャズ』と『スキヤット』を連想させる。書いているというより、喋っているように感じられる一人称の語りを意味する言葉である。この種の小説では語り手は自分を I と言い表し、読者に you と呼びかける」²⁷⁾

英文学畑で使われている「スカース」という用語は、しばしば、ロシア文学におけるスカースの意味から離れたものとなっており、ロッジの定義もその例に漏れない。しかし、読者―聞き手への語りかけという面を押さえている点、けっして的是なずれとも言えない²⁸⁾。ではそれをロシア語に訳したものは、ロシア文学でいうような本来の意味でのスカースとなり得ているであろうか。なり得ていれば「スカース」という国際化した概念が、サリンジャーの作品というヴィークルに乗って、祖国に幸福な帰還を果たしたということになるのだが、なり得ている、と断言するだけの自信は筆者にはない。特にスカースと普遍人称文との関係がどのようになっているかという点は今後検討すべき問題である。

7. 結 語

ホールデンの ‘you’ がロシア語訳においてどのように処理されているか。その分析を突き詰めればこの ‘you’ がいったい何者であり、なぜ我々が『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の二種類の邦訳を持つに至ったかが明らかになるはずだ。語学的な観点から出発した我々はこうして、いつしか告白体の文学をめぐる考察に足を踏み入れていることに気づく。どんな告白でも、たとえ内的独白であっても、二人称の受け手を仮構することなくしては成立しない。『キャッチャー・イン・ザ・ライ』においてこの仮構された受け手は明示的に ‘you’ と表される。しかしこの ‘you’ は本当にただ仮構されただけのもので、「いい日本語」のなかでは姿を隠していなければならない存在なのだろうか。柴田元幸氏は言う。

「博物館のところで、誰かと手をつないでいて、君の手が向こうの手と触れ合って、という話が出てくるところで、原文を見ると your hand なんだけど、文脈的には明らかにホールデンの子供の頃の話を話している。だから「僕の手」と訳しても良さそうところを、村上さんはあえて「君の手」と訳して、それがホールデンの体験でもあり、読者の体験でもあるような、読者を引っ張り込むようなかたちで「君」というのを使っていると」²⁹⁾

ここに指摘されている「読者を引っ張り込むような」

「君」の用法は、スコブリコヴァの挙げる普遍人称文の特徴、「話者が対話の相手を共同的な観察、共同経験へと招いていることへの暗示」に近いものを感じさせる。

保守的な言語観から柴田氏に反論することはたやすい。ロシア語では、一般化された真理を記述する普遍人称文が内包するのは具体的な「君」ではなく普遍人称の ты である。ホールデンが少年時代の博物館の思い出を語るとき、二人称の受け手として彼の幼年時代を追体験しているのは特定の誰かではない読者である。ホールデンがスーツケースをめぐる個人的体験から、ルームメイトたちの劣等感について語るとき、「こっちのが本当に優秀で、相手のがそうでない場合」というたとえ話のなかには普遍人称の ты である。具体的な「君」を突出させなくともロシア語の中には普遍人称文という仕掛けがあって、相手を「お前、君」よばわりすることなく二人称の受け手を「共同的観察」に招き入れることが出来る。そしてそれは日本語では、冒頭のギルが言うとおり、主格なし文にほぼ相当するものである。

しかし、本論で仮に「いい日本語」と呼んだ野崎孝訳のホールデンですら、最後の部分を見れば明らかな通り（「僕がながながと君に話してきたことを全部ひっくるめて」³⁰⁾）終始一貫「君」に語りかけているのである。ホールデンの語りにおける you の奔出の最終的な宛て先には、やはり何らかの名前を割り当てることが必要なのだ。

三島由紀夫が全共闘学生の罵声に向かって「君のは日本語で主格が省略されていて『いい日本語』なんだけれども」と声を荒げたのは 1969 年のことである。野崎訳はそれに先立つ 1964 年に刊行されている。それから長い時が経った。一般化された人称をあらわそうとすれば主格を省くしなく、ことさら「君は」「あなたは」と呼びかけると異様な感じがしてしまうという日本語の特質に大きな変化はない。が、少しだけ状況が変わったこともまた確かである。今日、ある種の文学的な日本語の書き手は、潜在的な二人称の受け手に「あなた」「君」と語りかける権利を持っている。このような日本語の文体の変化が村上春樹という名と強く結びついており、彼が日本の作家ではなく翻訳小説の文体から自らのスタイルを作り上げていったことはあらためて紹介するまでもないだろう³¹⁾。すでにデビュー作『風の歌を聴け』に次のような一文が見られる。

「もしあなたが芸術や文学を求めているのならギリシャ人の書いたものを読めばいい」³²⁾

通常の日本語の感覚からすれば「あなたが」は不要であるが、この文体はあらゆる告白がその構成要素として内包する潜在的な受け手を明示的に浮かび上がらせる効果を持つ。

そして村上春樹は自らが推し進めた文学言語の改革の責任を敢取するかのように『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の新訳を世に問うた。その企ての核心をなすのが、主格なし文の普遍性の中に姿を隠していた「君」を、英語の you のように、ロシア語における普遍人称の ты のように、

ホールデンの語りの中に招きいれようという文体上の賭けなのである。その「君」のなかに、ロシア語の普遍人称文が持つような普遍性・一般性が凝結しているかどうかについては無条件に肯定的な答えを出すことはできない（ロシア語訳のホールデンが読者に呼びかけるときには ты ではなく вы「あなた（がた）」が使われていることも忘れてはならない）。しかしあらゆる告白体文学が内包する潜在的な受け手を「君」と指し示してみせたことだけをとりとめて、我々が村上春樹訳を持つ意義は決して小さくないのである。

註

- 1) 本論は言語人文学会第 13 回大会（2003 年 9 月 28 日、岩手大学人文社会科学部）での報告を書き改めたものである。
- 2) Михаил Булгаков. Собрание сочинений в восьми томах, Т. 1. Записки покойника. Автобиографическая проза. СПб., 2002. С. 127. なお次の邦訳がある。ミハイル・А・ブルガーコフ『モルヒネ』、町田清朗訳、未知谷、2005 年。
- 3) ロビン・ギル『英語はこんなにニッポン語一言葉くらべと日本人論』、筑摩書房〔ちくま文庫〕、1989 年、36-37 頁。下線は原文。
- 4) 渡部昇一『英文法を撫でる』、PHP 研究所〔PHP 新書〕、1996 年、94 頁。強調は原文。
- 5) Русский язык. Энциклопедия. Издание 2-е. Главный редактор. Караулов Ю. Н. М., 1997. С. 273-274.
- 6) 中澤英彦「文の普遍性と普遍人称文」、『言語研究 VII』（東京外国語大学）、1997 年 3 月、133-142 頁。
- 7) Виноградов В.В. Русский язык. М., 1972. С. 365.
- 8) 青山南、『ピーターとペーターの狭間で』、1987 年、本の雑誌社、39-43 頁。
- 9) 越川芳明、沼野充義、新元良一「村上訳を読む」、『文学界』2003 年 6 月号、286 頁。
- 10) 原文の引用には次のものを用いた。J.D. Salinger. The Catcher in the Rye. Little, Brown, and Company. 1991.
- 11) J.D. サリンジャー『ライ麦畑で捕まえて』、野崎孝訳、白水社〔白水 U ブックス〕、1984 年。
- 12) Сэлинджер Дж. Д. Над пропастью во ржи. Роман. М., 1993. Перевод Р. Райт-Коваревой.
- 13) ドイツ語圏でのこの作品の翻訳を論じたマンデルは、ここでの you を jemand で訳している例、および Sie で訳している例を挙げ、後者は正確だがフォーマルに過ぎて読者との親密な接触を損なっていると指摘している。またなぜ両者が du を用いなかったのかの理由として「うちとけることへのためらい」を挙げている。Mandel, Siegfried. Salinger in Continental Jeans : The Liberation of Böll and other Germans// Critical Essays on Salinger's The Catcher in the Rye/Ed. Joel Salzman, Boston Massachusetts : G.K. Hall & co., 1989. P. 218-219.
- 14) 「全共闘 C だから自然というものはわからないのだよ、全然。/三島 誰がわからん？ わからぬというのは、君のは日本語で主格が省略されていて『いい日本語』なんだけれども、誰がわからぬと言っているの？ 君がわからぬ？ おれがわからん？」、『討論 三島由紀夫 VS 東大全共闘』、1969 年、新潮社、34 頁。
- 15) Словарь современного русского литературного языка. Т. 15. С. 1187.
- 16) Скобликова Е.С. Современный русский язык. Синтаксис простого предложения. М., 1979. С. 110.
- 17) Там же. С. 110.
- 18) Там же. С. 110.
- 19) 中澤英彦「文の普遍性と普遍人称文」、136 頁。

- 20) Скобликова Е.С. Указ. Соч. С. 112-113.
- 21) Там же. С. 110-111.
- 22) Schriber, Mary Suzanne. Holden Caulfield, C'est moi// Critical Essays on Salinger's *The Catcher in the Rye*/Ed. Joel Salzberg, Boston Massachusetts : G.K. Hall & co., 1989.
- 23) J.D. サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』, 村上春樹訳, 白水社, 2003年, 201頁。
- 24) 村上春樹, 柴田元幸『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』, 文藝春秋 [文春新書], 2003年, 24頁。
- 25) 奥野健男「解説」, 太宰治『人間失格』, 新潮社 [新潮文庫], 157頁。
- 26) Lilian R Furst, Dostoyevsky's *Notes from Underground* and Salinger's *The Catcher in the Rye*//Critical Essays on Salinger's *The Catcher in the Rye*/Ed. Joel Salzberg, Boston Massachusetts : G.K. Hall & co., 1989. P. 181. この論文について筆者は自身の観点から再検討を行った。梅村『『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『地下室の手記』—リアン・ファースト説を起点とする間テクスト的読解の試み』, 東京農業大学農学集報, 第51巻, 第2号, 2006年。
- 27) デヴィッド・ロッジ『小説の技巧』, 柴田元幸・斎藤兆史訳, 白水社, 1997年, 33頁。
- 28) ロシアの文学百科には次のような一節が見られる。「スカースの構成は読者—聞き手に向けられている。語り手は読者—聞き手に向かって, 直接, 自らの生きたイントネーションの染み渡った言葉で語りかける」Краткая литературная энциклопедия. Т. 6. М., 1971. С. 876.
- 29) 村上春樹, 柴田元幸『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』, 110-111頁。
- 30) J.D. サリンジャー『ライ麦畑で捕まえて』, 野崎孝訳, 白水社 [白水Uボックス], 1984年. 332頁。
- 31) 村上春樹, 柴田元幸『翻訳夜話』, 文藝春秋 [文春新書], 2000年, 219頁。
- 32) 村上春樹『風の歌を聴け』, 講談社 [講談社文庫], 12頁。

How ‘you’ is translated in the Russian translation of Salinger’s *The Catcher in the Rye* : A comparison with two Japanese translations

By

Hiroaki UMEMURA

(Received August 23, 2007/Accepted December 14, 2007)

Summary : The author of this study wishes to analyse the Russian translation of Salinger’s *The Catcher in the Rye* by Rita Wrigit-Kovareva and, in comparison, examine two Japanese translations of the novel. In Salinger’s novel, Holden Caulfield, the hero and the narrator, employs the second person pronoun ‘you’ so often that for the reader, when s/he is not from Anglophone backgrounds, it is very difficult to determine if Holden is speaking to his companion very intimately or just telling his story to the reader in general. This plethora of ‘you’ is challenging to a translator as well. Wright-Kovareva translates this ‘you’ in several ways. Sometimes it is replaced by ‘I’ or ‘we’. Or sometimes *bezlichnoe predlozhenie*, i.e. a nonpersonal sentence is employed to indicate what Holden observes objectively. However, when Holden tries to generalize his entirely personal experiences, *obobshchonno-lichnoe predlozhenie* (a sentence of the generalized person) appears. It is a second person singular sentence, very often without a pronoun which designates the subject. In Japan, Takashi NOZAKI, in his well known translation of the novel, also attempts to avoid using a second person pronoun so as to make Holden’s narrative natural to the Japanese reading public. On the contrary, Haruki MURAKAMI, in his sensational new translation of this renowned novel, makes Holden talk to one particular listener-reader by using the intimate second person pronoun ‘kimi’. Murakami’s attempt to elicit who this ‘you’ is seems to be rather moot since, unlike the English pronoun ‘you’, ‘kimi’ does not have the capacity to signify a generalized person. But his experiment to apply his own highly translatable style to Salinger’s novel is of great interest because what he tries to do with this translation is to reveal the role of the latent listener-reader which every confession in any language entails.

Key words : Salinger, translation, Russian, Haruki MURAKAMI

* Foreign Language Studies (Russian), Faculty of Bioindustry, Tokyo University of Agriculture